貝盡浦の錦　地

特1
373

要貝（よめかい）

無對類（むついるい）　扇（あふぎ）の要角（よめかど）ある貝（かい）にて色赤黒し小貝（こかい）之稀（まれ）なる貝也

関守（せきもり）

螺類（らのるい）　たてなかく高く筋（すじ）さし白き出てなる貝さいとのみよ

紫く別（べつ）なり

紅鸚哥（べにいんこ）

無對類（むついるい）　おりゞ貝（かい）の形（かたち）小さく外紅色（そとべにいろ）なり小貝（こかい）ゝくしく

内（うち）も紅色（べにいろ）なれども外（そと）より薄（うす）し竹野（たけの）浦に出る

薄櫻（うすざくら）

蚌類（がうのるい）　櫻貝（さくらがい）の形（かたち）乃やゝふくらかし色まゝ紅（わとそろ）ほ多（おほ）くハ白く

ガラス使用

特1
373

もげてわりよわりぬ貝なりわか浦にて是をい介と云

蛤類　八重梅　（和歌浦にてハ夜の梅と云）

梅の花介に似てしげるたとのを云同類別種也

挂介

無對類　あつく白きにせうく紅のうつまかけからまろし

雪雀に似てちいさし

雪家介

蛤類　白く縦横に筋細く立たる貝に似て別なり

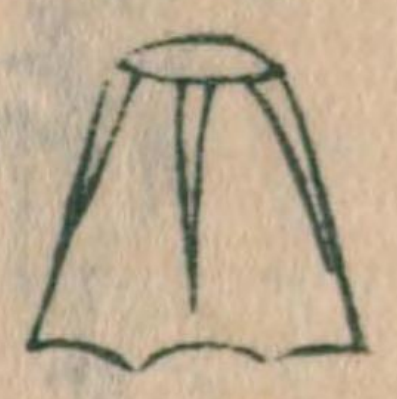
蝉の羽

蟹類　此介ハそのふさなるたしうすく光り色やわらかく

せみの羽に色をさぬく口ハ形ハ図にてハ尽しがたし

藤壷　（俗称でんがう介）

異類　石に付くる肉なきハ殻にても

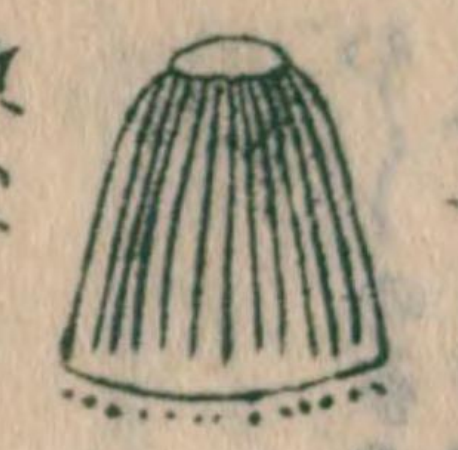


このやうの形

又頭に穴ありて下ハ底のあるも有又なきもあり色紅紫

色よきもの多き介也

塩風介　（百貝図にふぢ壺とせるハ烏帽子貝也）



異類　形ぬちはやに細くまる深ぞみ色ふくたてすじ

あやうなるもの多く又其括り裏に穴あり

底ハ山も平もなくくちもと立

松風

蚌類　色白くして横に細くこまかに筋あり和歌浦にあり

薄き介なり

薄雲

蚌類　底厚し地白くちらちらと少し黒き斑点あり

鶯介（百貝圖には是を孔雀貝と云）

蚌類　千鳥貝の色あるやうなるを云

巻物介（又丸まん介と云）

螺類　総ぢるごとくの白紋てある介し縁にて底赤し

椎の實

螺類　みじかく丸し白きにかきの斑点ありて椎乃實の

ごとしすべてに似たり拳螺類なり

花筵（是神にある八鬼介と同物歟）

螺類　角ある形のものなり底横に紋ありて異形なる介なり

たぶあく白くうす紫色あり

玉蔓

蚌類　たてに淺く筋ありて色白し中介なく小さきは縞なり

巾着介

蛤類　きんちやくのごとし色まつ黒くいろや介のふうなり

二つ合せたるがごとしぬくれ泥見なり

枕介（二種あり）

螺類 みな貝の類にて黒くつやありて斑文あり
一種ハ前仙の中にあるし蚌類なり

悪鬼介 （百貝圖ニ百鬼貝遷貝とも云）

螺類 これ多くハ小介にして稀なるものハ色ハ白し
觜角ありやうにもしく是にもこれ多くハ刺螺の類なるべし

腰高 （百貝圖ニ盲貝と云なり）

螺類 うらおもて紫にて筋ありよのつねの介形り溢まらしてる
かんがうと云下品し

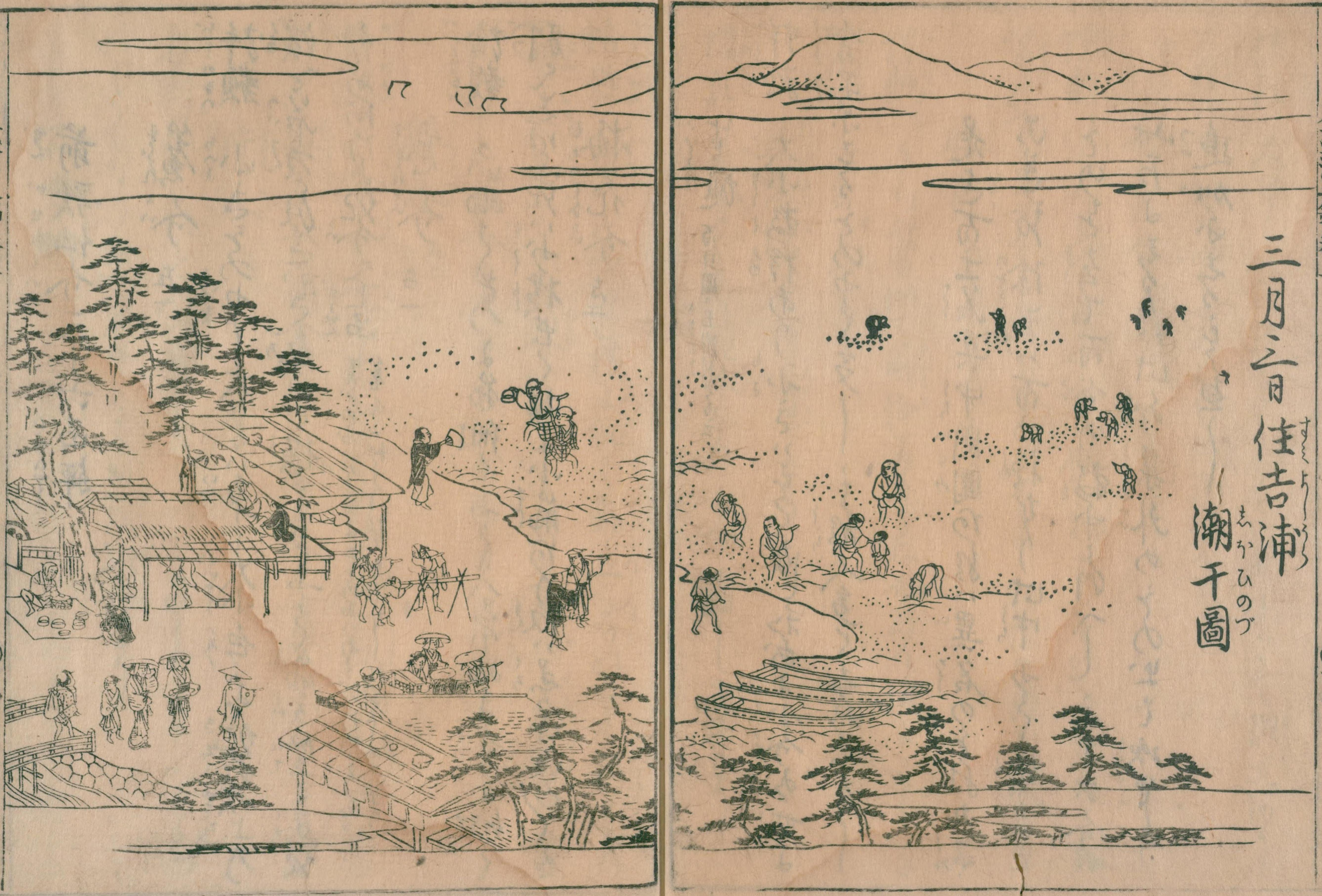
鬼芋螺 （百貝圖ニ天狗貝と云なり）

螺類 角多くある蛇介なり小介にして下品なり

生雄 （百貝圖ニ玉珧貝とも云）

蚌類 大小数種あり小さいものハなし和名にハ小介にして世にも
合并にあるものハ少し多くきとる形人多く知るごとし

是を百十五品其中圏圍の形ハ異名のもれ九品
ちき残除去ハ百二種なり此中おほく得がたき
ものを去て百介の数にいれべし 二十六介ハ
此右にある所此の集外のものを追加あり
追加にあるべし



三月三日
住吉浦（すみよしうら）
潮干圖（しほひのづ）

前歌仙貝三十六品評

蚌類

簾貝 左一

小きハめづらし大なるハ多し大小色々あり紀州吹上乃濱を名産とすあかき色あかく横に高くふとく筋立竪に黒筋あるもありよき貝之上品

（舊名の寫ハ今案ずるに云ふとの名ハあらじ河州より出る簾貝ハ細くして竪すぢなし横すぢのみなり）

忘貝 右一

蛤類 うすくまるく筋細くふかく入赤みある貝なり細く別之志ほ多紀ハ白く横長く横に小筋あり紋ハ黒くさいろくみ

梅花貝 左二

蛤類 白くつやなし横に細く筋立之貝也是を梅花乃一瓣落たるかとし此貝小ゆへさまざま多し八重梅雪輪などさまざまし此貝の大なるを和布蒲ぬし焼貝と云

桜貝 右二

蚌類 此貝あまねく世に弁ぜしごとくわすれの貝を桜貝と名付入る細くハ誤なるべし桜貝ハ薄く赤き貝之舊說の誤よりて論ど

片貝 左三

無對類 これをみぢ貝と云ふもの也なりよあかさしのことぢれごとくなりたるを云是又同類別種なり

石決明 右三

ガラス使用

無對類（むついるい）ハ世（よ）尓まるごとしなれ共所々を出るハ小（ちい）さきもの稀（まれ）なり

蛤類（ごうのるい）　紫介（むらさきがい）　左四

紫（むらさき）ハ此歌仙（このかせん）に入ハ和哥尓多く云むらさき貝ハあらず

右よ云裏紫（うらむらさき）と云介（かい）なり後（ご）歌仙よ云紫介（むらさきがい）ハさくら貝と云

ものゝ唇（くちびる）にさくら色にて地白（ぢしろ）く紫のかゝりたる物分（ぶ）介あるものにしてよし

後歌仙の方是なるべし此外よ云紫貝ハ又貝子の類（たいを）にて別物（べつもの）なり

白介（しろがい）　右四

蛤類（ごうのるい）　此歌仙に入ハ志ら介（かい）なり後歌仙よ入る白介（しらがい）ハ

別なりしろ介を後歌仙（ごかせん）よ花介（はながい）と云ハ恐（おそ）らくハ誤（あやまり）なるべし

蛤介（はまぐりがい）　左五

蜆介（しゞみがい）　右五

右よる蛤介（はまぐりがい）ハあまねく世（よ）尓まるごとし二種あり雅（が）ならぬ故

介なれども古哥（こか）によみ來（き）しが幸（さいはい）となりて歌仙（かせん）の数（かず）よ入しなるべし

溝介（みぞがい）　左六

蚌類（ごうのるい）　いかにもうるはしく紫色なり蟶（まて）よ似て小（ちい）さし大（おほき）なる

これなし　くはしくやさし

蚌類（ごうのるい）　蟶介（まてがい）　右六

世（よ）尓まるごとし小（ちい）さきものハ少（すくな）し馬刀とされしを訓（くん）ずるハ誤（あやまり）なり

花介（はながい）　左七

蛤類（ごうのるい）　是（これ）ハ櫻介（さくらがい）と云ものゝ花（はな）がいとも云べきものなり

赤くうすき貝なり横に長きを色貝と云ちさきを櫻貝と云ちかごろ人あり同類なく別種にて此珍紀にハ花貝と云り

瞿麦貝　右七　百貝圖ニ海菊と云

蛤類　厚くあらくしくにやはらいらくのやうなるものを色濃紅なりすこし細きもみて大なるハ色あし小さき稜をよし此貝ハいろよくやさしき貝にて紅貝と云人もあり錦貝となでしこと覺し人もあり後珍紀にハ錦貝をなでしこといへりいづれか是なるやをしらず錦貝にハ又色そなはる錦とも云べしなでしこにハ赤のみ見ゆ是にて按ずれば此撰に入べきなでしこなるべし後珍紀ハ誤なるべし

空背貝　左八　百貝圖ニハ甲貝と云又へなぶりと云

螺類　此撰にハ撰べき貝を云後珍紀ニハうつくしき貝を云和歌ありて云ものハ又別に一種をいづれか是なるやをしらねど此撰に入うつせ貝ハ和歌にハ玉貝と云又古來和歌の注にハよむべき肉のなきをうつせ貝と云よし見えたりまづ此大の珍紀ニ入ハづ色よき貝を撰して少し貝光又ハ光螺と云ものなり

袖貝　右八

螺類　此珍紀に入ハ小さき貝にて地白くこまかきのあやのやうなるをやうあるもで貝にて又一種和歌にて云ものハ別なり螺にして口の方袖のごとく長く出しを云大なるを俗に猿頭貝と云ものゝ

船貝　左九　百貝圖ニ猿頭と云

蚶類　此捲に入る蚶介と又和名浦なく云船介とちがふ事なり
形状文まつしかとし器も又それかしきをそのまゝ付られバさげかし

蜑介　右九

無對類　此貝ハ昔和名なくこ偏が爪と云しをのち今ハ是を和名
なくもあま介と云厚き貝にし地薄黒く白き斑文あるよき介なり

浦打介　左十

螺類　是ハかまに一つありけるとて見るをのぞき替りとハ
ちがふ太きく或ハ小く其形介かし色わろくあと白し
黒くかうしあるとなりうらうけのごとく細き筋ありて

礒介　右十

無對類　其色ハ皿にあれかさ又ハだにさうかなど云俗称有
一種ハそ貝と呼ものハ百貝の中に弁がごとし

佐多類　左十一

螺類　世に多くあるごとし小きとのかし爪さるべくて
又一種あり俗にハさゞいと云なり

千種介　右十一　（百貝圖ニハ白地ニ彩色なり　かやうなるも有と）

螺類　下そのり殻きうるやう小さき渦り色こく紫ふびと云
色れどし小介なくあまたくなし

粒あら介　左十二　（百貝圖ニ空蝉貝とも云）

螺類　色白く渚やちさされしをのハ渚やなけきそじ立ぬるハ

悪しき形容なれどもさればあるべし

津貝　右十二

螺類　粒ある貝に似てふくらみ高しそのまゝ地白く褐色斑文多くあり

鳥貝　左十三

蚌類　形ち千鳥貝に同しく色黒し白きに褐色のまじりあるを千鳥と云又あるいは縁に黒き斑を鶯貝と云なり皆同類にて色のかはり多く名かはるべし

雀貝　右十三

無對類　石に貝の付あり肉なきハ砂中にあり色うすき

白きも又黄なる色にても二種の文蹙向ふて背ひくきものを雪雀と云かたち雀に似たり多くある貝なり

都貝　左十四

螺類　からに似たりうすきの地にこく筋のかいかくる

梭尾螺　右十四

螺類　本草に出たる又法螺とも申なり形状世にあるごとし小さきものなし

車渠　左十五

蛤類　俗にしやくし貝とて大なるを杓子に用ゆるそのかたち蛤にいうもく光ハなし世上に多くあるごとし

おもて貝とも云文海扇とも云多き介なり文蛤貝と争ハ
大なる誤なり

色介　右十五

蛤類　此撰に入色介の図あるをかくしなでしこ介を
色介とも云桜貝の出てなるも色あさきにより色介とも
云あるを此旧本の図乃やうなる貝ハあらじおぼつかなし
半誤りなるべし按まなでしこ介小錦介を図せバ此
色介ハ丸きもののなでしこ介なるべき歟

破介　左十六

いづれの介なくも破るゝと云なり此撰ミろく古名を求バ

かやうのやくにもたゝざるものを入たり

瓶介　右十六

是も瓶あり貝をのべく云ども図にハ螺の類なく出て
なるを瓶つきさまんの出る様図せり

小介　左十七

ちいさくこまかき介と云り

真蘇枋介　右十七

螺類　大なる米粒のごとし色ハうし蘇木よく染る
やうなる色へ名付しとみえたりすべて小介ニて大なる
ハなし白きをえらず介と云後撰仙に入る事あらし介

国立国会図書館　タイトル『貝尽浦の錦 3巻』 請求記号 特1-373　ガラス使用

是とハ大に別なり

蛤類　浪間柏介　左十八

小さき合しハかしぬきハ深くこハ深しうらを黄白に光ありてうすく色紅ぬく介なり多くあるもの也

或説書にたみまうしハとあいかきと云貝なりとあれどもかさとハ大に別なり

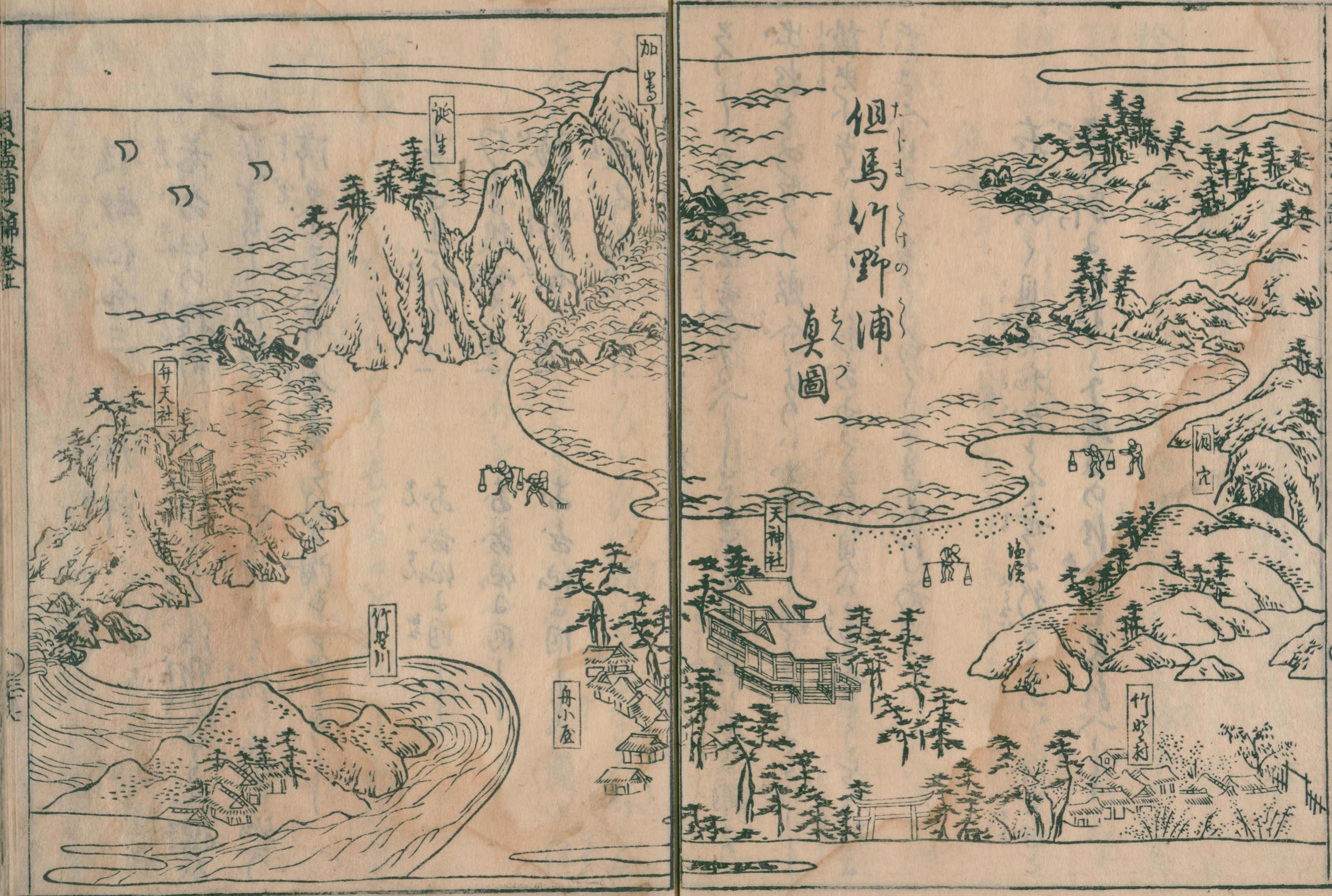
貽介　右十八　百貝圖ニハ塩貝と云ものに似たり又別に貽貝あり紫貝黒貝とも云

蚌類　これハいがいとも声ふく云なり和名ふく云いがいとは呉とハ大に違へり此圖による時ハ但州に多起るの様ばと記介を云紀志とも弁ごとし西行の歌による時ハ阿こやと（阿見の中の方乃かし）云亜かうゞいハ貝とも云べし寳れあとゝ云ハ中乃真珠を

そうしろと云意なるべしさりども真珠ハ石決明より出るものなり貽介よりハ出まじ此すくさがハし識老ふ告で行べし和名ふく云ハ貝ハまとくろさうちて横に長き介なり多く白くさまそげあり

右の六く貝合和名とて世に行るものを俘と為と呉ハ別にしれく下巻の貝合せ又さるべし

但馬（たじま）竹野浦（たけのうら）真圖（しんづ）


天神社
塩濱
洞穴
竹野村
加嶋
誕生
弁天社
竹野川
舟小屋

後歌仙貝三十六種評

前歌仙の撰ありしを離れて其後浪人某撰びなをし細かに再び筆を評じ其趣ハ後歌仙乃序文に見えたり全書これに附を見るべし

ちぐさ貝　左一

わすれ貝　右一

梅の花貝　左二

花貝　右二

前歌仙に同し

前歌仙に同し

前歌仙に同し

前歌仙には櫻貝をえらびし故此撰に入ハしころ貝と云ものなり是を花貝と云事うたがひなし其図の集ハ形ちの赤くいろある貝を云なるべきや

櫻貝　左三

蚌類　うすく赤き貝なりもてるゝを和歌などに色貝と云みじかく小さき櫻貝と云此図に合せり

海松貝　右三

蚌類　みじかき蛤の如く蛤よりちひさし赤吹貝と云ものゝ小くもいろくろきかすりあるを和名かゝと云此撰乃図も是なり前歌仙には螺類の貝なり大に相違せり

国立国会図書館　タイトル『貝尽浦の錦 3巻』 請求記号 特1-373　ガラス使用

いづれ歟是なる事をしらず或説にまゝとか貝に三種あり
越前の色は淡より出るを真とするよし色の濃はそれの
余未ぞしらず不尽

ふしき貝　左四　前に論ずるがごとし

いろ貝　右四

あるに図するハ舞貝と翫貝撰に云それの赤き色ある類
それを云なるべし又なでしこ貝のやゝしふもん和翫貝撰にて云ハ
桜貝の横に長きを色貝と云此方是なるべし

むらの貝　左五　翫貝撰に同し

みやこ貝　右五　翫貝撰に同し

うつせ貝　左六　翫貝撰に同し

さたべ　右六　翫貝撰に同し

むらさき貝　左七

此図ハ翫貝撰にちがひさくら貝の方なるべしさくら貝の
事前の百貝は中に論ず

しら貝　右七　翫貝撰に同し

なでしこ貝　左八　翫貝撰に同し

浪るのしハ　右八　翫貝撰に同し

こきぬて貝　左九

あまてハ和歌浦にてさ浪と云貝なり百貝の中に注し侍る

はくら貝　右九　百貝圖に塩貝塩津貝とも

蚌類　大なるハなし小貝なり色白くきやなし一種和哥の浦にて云ものハこまかし貝のごとくなる螺の類なり色黒く同色の斑点あり

千象貝　左十

蚌類　かたち象れおなし烏貝と同類にて千象の方ハ白くもとにしかさのうちひろく多き貝なり

もとじ貝　右十　お哥仙に同し

いたや貝　左十一　お哥仙に同し

あこや貝　右十一

蚌類　お哥仙に入るものと後哥仙に入るものと圖わ違せり此撰に入るハ和哥の浦にてきんちやく貝と云ものに似いづまり是なるをもちゐばあこや貝ハ貝とゐるよし　あまに論ぜるがごとし（わこハ阿児と津海士の児なぞを云なるべし貝の名にハあらば）

あハび貝　左十二　お哥仙に同し

かたし貝　右十二　お哥仙に同し

うきせ貝　左十三　百貝圖に八代貝と云

螺類　うつせ貝と云ものなりもとじふとくあつくくちうづらの生れどくかさ色の斑文ありうつくしく紀貝へ委くハお哥仙の中に評ぜ

こなし貝　右十三

螺類（らのるい）上長く下みじかく巻まりくるまやゝある貝なり色あひこく
おほどもし地白く黄赤きすぢが多し　桜に十四番小貝なる品
このなる貝をよみしなるべし後に強て一種の
貝に名とせし歟

わさり貝　左十四　百貝圖に白貝と云恐らくハ誤なるべし又高濱貝と云もの是也

蛤類（がふのるい）はまぐり小ぶりにて横に長し紋ハいと細くあり
紀州より多く出るはまぐりと同じく紫黒有り周ゆ
はまぐりより文いろく面白さこの大小あるに任せてあつ

志め貝　右十四

蛤類（がふのるい）小貝なるゆゑ大なるハいまだ見ず色白く紋あし稀に
紋あるもあるかしむらさきなるやうなる貝あり多くは

梅ある貝　左十五　おふ仙に同し

かゝり貝　右十五

おふ仙に云は貝と同梅歟此番ハいとおかし貝と云
このに同じ是姫末摩

あしかい　左十六

蚌類（ばうのるい）和名みなく云いよすがきと云貝あり色ごき貝の
形に似てすぢ長し地うすき黄にいろきの艶れやうなる
文あり清や表貝なり小きハかし大なハ多くある貝あり

みぞ貝（がい）　右十六　前歌仙に同し
たゆぐり貝　左十七　前歌仙に同し
ちゞみ貝　右十七　前歌仙に同し
小（こ）貝（がい）　左十八　前歌仙に同し
ちくさ貝　右十八　前歌仙に同し

以上後歌仙（ごかせん）三十六品（ひん）の評（ひやう）なり　前歌仙（かせん）合歌、なるに後歌仙の方委（くハ）し　此撰（せん）を見（みる）べきこと多し　前歌仙（ぜんかせん）に九種（しゆ）　後歌仙に九種　合（あハせて）十八種（しゆ）　別（べつ）乃貝（かい）あり　是（これ）ハ名（な）も貝（かい）を別（べつ）なり

三十六の内（うち）前後（ぜんご）ともに同（おな）じ名（な）あるもの二十七種（しゆ）　夫ゝの形ども同名異物（どうめいいぶつ）のもの七種（しゆ）中に除き両歌仙（りやうかせん）貝（かい）数（すう）になせば五十二種（しゆ）乃二十種ハ同名同物（どうめいどうぶつ）なり　始（はじめ）の貝（かい）名寄（なよせ）百二小歌仙五十二種（しゆ）入（いれ）惣計（さうけい）百五十四種なれど余（よ）が見聞（けんもん）の貝（かい）尽（つき）ぬ爾来（じらい）見（こ）及（およ）ぶものハ追加（ついか）に記（しる）べし

源氏介配當目録（げんじかいはいたうもくろく）

桐壺（きりつぼ）　月日介
空蟬（うつせみ）　本名 又せミ介とも云
若紫（わかむらさき）　ころ介 或もとじめ介
紅葉賀（もみぢのが）　こもみぢ介 一名かくし介
葵（あふひ）　本名
花散里（はなちるさと）　かとくぎれ
明石（あかし）　ともれ介
蓬生（よもぎふ）　みぢつが

帚木（はゝきゞ）　おし介
夕顔（ゆふがほ）　し舟介
末摘花（すゑつむはな）　だに介 一名なでしこ
花宴（はなのえん）　しだり桜介
榊（さかき）　たこ舟
須磨（すま）　しかまき介
澪標（みをつくし）　うしの爪
関屋（せきや）　しかじま

繪合（ゑあはせ）　しかゐき
薄雲（うすぐも）　本名
乙女（をとめ）　めくハじや
初音（はつね）　うぐひす介
螢（ほたる）　本名
篝火（かゞりび）　色介
行幸（みゆき）　山鳥介
槙柱（まきばしら）　うだし介
藤裏葉（ふぢのうらば）　うら紫
若菜下（わかな）　甲介

松風（まつかぜ）　本名
朝顔（あさがほ）　本名
玉鬘（たまかづら）　本名
胡蝶（こてふ）　蝶介
瞿麦（なでしこ）　本名 又錦介
野分（のわき）　むしろ介
蘭（ふぢばかま）　本名
梅枝（むめがえ）　ほこう介
若菜上（わかな）　ひめさざれ
柏木（かしはぎ）　つぐめ介

横笛 たけのこ介
夕霧 牛角介
幻 こさせうら介
竹川 ちご貝
橋姫 玉つばき
総角 ほり石
宿木 ゑり付介
浮舟 舟介
手習 まくさ巻介

鈴虫 まいむし介
御法 あまな介
匂宮 せささる
紅梅 ばれ舟介
椎本 えぬかとこ介
早蕨 まがり 石蛇く
東屋 くれや介
蜻蛉 とんぼう介
夢浮橋 ぶれう介

以上五十四種 （此中哥仙に入るの七種をば除 四十七種を百貝の中に評判す）

新撰六歌仙介

前哥仙の中まて介あま介の引哥介の哥とも見えず おそらくハかずのまじり袖介船介礒介鳥介四種ハ引哥よくの見えしれ介きさ介ハそらに歌よみしうく除ぞ むれを除引哥れ能かけ入る四種にせみ介みる介の二ツ古哥の哥あハ合て六哥仙の数とせり今左に記

左一　蝉介　　詠人不知

夫木集
蝉介の聲ときけバ村松の梢に浪の響なりけり

右一　みる介　　詠人不知

夫木集
打よするうらのひまにてよさの海れ遊びの浦に頃も経ぬべし

特1
373

左二　袖（そで）貝（かい）　西行

明
浪（なみ）あらふ衣（ころも）乃浦（うら）の袖（そで）がいを汀（みぎは）に風（かぜ）のたゝみおくかな

右二　烏（からす）貝　西行

山家集
波（なみ）よするしらゝの濱（はま）の烏（からす）がい拾（ひろ）ひやすくもおもほゆるかな

左三　船（ふな）貝

夫木集
さぐ人（ひと）もなぎさによする舟（ふな）がいはかはる風（かぜ）やはげしくなるらん

右三　磯（いそ）貝　人丸

月
みな底（そこ）の玉（たま）まじるいそがいのかた恋（こひ）のみぞとしはへにつゝ

貝盡浦之錦上終

ガラス使用

特1
373

左二　袖貝　西行

浪あらふ衣乃浦の袖かいを汀に風のたゝみをくかな

右二　烏貝　西行

（山家集）浪よするしらゝの濱のからすかい拾ひやすくもおもほゆるかな

左三　舩貝

（夫木集）さぐ人もおぼれさふ手なれ舩かひハ見ゆる浪やはなぐかなん

右三　礒貝　人丸

（同）荒礒の玉は海じまるいそがいのかた恋のまゝぞしいなかつ

貝盡浦之錦上終